

日本におけるアルフレッド・シュッツ研究の問題点

佐藤 嘉一*

昨秋、日本社会学会が立命館大学で開かれた折に、S大学大学院のS教授から現代社会学特殊講義の出講依頼の話があり、講義のテーマは「日本におけるアルフレッド・シュッツ研究の問題点」ということでどうか、また「何か事前に学生諸君に読むものを推薦して欲しい」ということであった。それであれば森元孝（2001）『アルフレッド・シュッツ—主観的現実と社会的空間—』（東信堂シリーズ・世界の社会学・日本の社会学）が良いのではないかと返事を書いたが、今年の4月に入って研究科長のT教授から拙著を示して欲しい旨の便りを頂いた。拙著（2002）『物語における社会とアイデンティティ—あかずきんちゃんからドストエフスキーまで—』（晃洋書房）があると、これには返事を出した。しかし講義の準備をしているうちに、推薦した書物の内容を飛び越えて、別の方向へ話の筋がどんどん進んでしまった。以下は、その講義録を基にして、その後若干の補足と修正を施して、まとめたものである。筆者の研究＝教育実践の1つの成果報告として『産社論集』に寄稿させていただく。

キーワード：アルフレッド・シュッツ、『社会学評論』、伝記・生活史研究、^{リーディングス}「読み直す」こと

1. アルフレッド・シュッツを〈読み直す〉

アルフレッド・シュッツについて、もっと深く知りたい¹⁾とか、シュッツ研究に将来〈指針〉となるような〈リーディングス〉を、上記の書物—「要約」に記載した2冊の本—以外に何か紹介してほしいとか、こうした要望を持っておられる院生や研究者がおられるかもしれない。ある意味でこれから述べる「日本におけるシュッツ研究の問題点」とも関わる要望であるから、細かな話に立ち入る前に、最初に、将来シュッツ研究の〈指針〉となる—と現在私が思っ

ている—〈リーディングス〉について触れておきたい。

「アドヴァンスド・コース」シュッツ—シュッツをじっくり〈読み直す〉という意味である—としては、次の2冊の〈リーディングス〉が入手できる。Michael D. Barber (2004), *The Participating Citizen: A Biography of Alfred Schutz*. State University of New York Press および Helmut R. Wagner (1983), *Alfred Schutz: An Intellectual Biography*. University of Chicago Press. である。〈伝記〉—シュッツの「生活史」*Lebensgeschichte*—を読むことの薦めである。どちらもシュッツに関する〈伝記〉研究として「内容の濃い読み読み応えのある」リーディングスである（どちらも現在〔2007年〕邦訳がな

* 立命館大学産業社会学部教授

い！？）。この2つのシュッツ伝記の持ち味であるが、バーバーによる『アルフレッド・シュッツの伝記』『まえがき』から知ることができる。

——もう大分昔である。レスター・エンブリー教授の次のことばが私の刺激となった。アルフレッド・シュッツのただ1冊の伝記、ヘルムート・ワグナー著『知的伝記』には、たしかにシュッツとその哲学仲間や社会学仲間の交流については完璧に記録してある。しかし彼の〈たくさんの興味深い生活〉は取り残されたままだ。皮肉なことに〈日常生活の哲学者〉の典型といわれる彼の日常生活がまったく不詳のままなのだ。私はこの欠陥を修復しようと、この〈伝記を書くこと〉^{ライティング}を計画した、即ち、シュッツの理論的作品を構成している「客観的意味」の下に横たわる主観的活動の〈覆い〉をとること、〈伝記をものすること〉Biological Doingに乗り出したのである。(Preface, p.11)

2. 文献等にもみるアルフレッド・シュッツの日本社会学への影響

2-1 『社会学評論』の中のアルフレッド・シュッツ

西原和久等*の調査による、日本社会学会機関紙『社会学評論』の投稿論文の論文タイトルに掲げられた「代表的社会学者」の変遷を掲載の頻度別でみると、1950年代、60年代、70年代を問わず、ウェーバー、デュルケムそしてパーソンズの3人が上位を占め、その後の80年代および90年代においてもこの3者が『評論』誌上に上位を占めていることがわかる。アルフレッド・シュッツが『社会学評論』に姿を現すのはようやく1980年代からである。戦後の日本社会学界における〈伝統的権威者〉^{オールド・オーソリティ}としてのウェーバー・デュルケム・パーソンズに対する〈新参者〉^{ニューカマー}シュッツという構図がここにはっきりと示されている**。

表1 「理論社会学の五十年」にみる代表的社会学者の推移

社会学者名	合計	50年代	60年代	70年代	80年代	90年代
1. ウェーバー	32	3	8	9	7	5
2. デュルケム	23	3	5	3	4	8
3. パーソンズ	18	5	4	3	4	5
4. シュッツ	11	0	0	0	8	3
5. マルクス	9	0	2	5	2	0
6. ミード	8	1	0	2	2	3
6. ルーマン	8	0	0	0	5	3
8. ハーバーマス	7	0	0	0	5	2
9. ジンメル	5	1	1	0	1	2
10. ギュルヴィッチ	3	3	0	0	0	0
10. マートン	3	1	0	1	1	0
10. マンハイム	3	1	0	0	0	2

* 西原和久・杉本学「日本の社会学：『社会学評論』にみる理論社会学の五〇年；[所収『情況』2000年八月号別刷314頁]からの引用である。

** 社会的行為の理論をめぐる〈シュッツ＝パーソンズ〉論争（後述）は、社会学における〈伝統的〉権威者の理論と〈新参〉者の理論との〈間〉の「人間の社会的行為」の研究をめぐる〈視座〉の相異を明らかにして、〈なにがどう〉折り合いが付かないか、その〈論争点〉を明らかにしたという点で、結果的に有意義であった。

2-2 日本におけるアルフレッド・シュッツ研究の文献目録（1950-2006）

本稿のテーマに関わって〈もう一つの資料〉を示す。早稲田大学的那須壽研究室が公開している『アルフレッド・シュッツビブリオグラフィー』<http://www.waseda.jp/schutz/htm/>である。このビブリオグラフィーは①年次別に配置された研究者の人名の一覧と②その研究者の論

文タイトルの一覧が掲載されている—ただし、本稿ではビブリオグラフィーに掲載された資料のうち若干の原資料に直接当たって訂正・加筆した箇所が一部含まれている—。ビブリオグラフィーにおいて論文名にノミナーテされる研究者および事項のうち頻度の高いものから順番に並べると、次のような結果が得られる。

表2 ビブリオグラフィーにみるシュッツ理論に関連性の高い社会学者群像***

A・シュッツ	109	ガーフィンケル	5
M・ウェーバー	14	P・バーガー	4
T・パーソンズ	10	T・ルックマン	3
N・ルーマン	7	G・H・ミード	3
E・フッサール	6	J・デューイ	3

***その他にJ・ハーバーマス2、E・ゴフマン2、W・ジェームズ1などが加わる。

表3 シュッツ研究に関連性の高い事項（語彙）群****

現象学	77	相互行為（作用）	20(7)
日常（生活）	33	構成	14
意味	29	間（相互）主観性	13(3)
エスノメソドロジー	26	リアリティ	12
生活世界	24	レリヴァンス	12
理解（理解社会学）	23(7)	類型性	11

****以上の語彙のほか、自然的態度6、物語5、実証主義4、生活史4、語り4、解釈的アプローチ3、会話分析3などが加えられる。

表1によって「戦後日本における理論社会学の歴史のなかでシュッツ社会学が占める特異な位置」について、さらに表2および表3によって「どのような社会学者との関わり」で日本の研究者たちがシュッツに関心を寄せているか、いかなるジャーゴン（専門用語）によってシュッツ研究が行われているか、これらの大凡の知識が得られると思う。

その大凡の知識を整理する意味で以下簡単に2、3のことを指摘してみよう。第1に、研究

者群も事項（語彙）群もいずれも日本の戦後60年間に蓄積されてきた社会学関連の財産目録のうち比較的〈新しく採録された〉ものである²⁾。

第2に、これら一連の新しい〈語彙〉を通して〈社会や人間〉についての新しい見方、〈新しい〉方向での社会学的研究が〈活性化し始めている〉こと—ガーフィンケルのエスノメソドロジー、会話分析、生活史、物語論などの展開など。そして第3に、その調査研究の発信者たちが日本の〈高度経済成長期〉に成人した

〈新^{ニュージェネレーション}世^代〉である。〈旧世代の成熟した社会学観〉に比べると、なにやら〈子供っぽい〉未だ成熟しない社会学観のように思える。新しい世代の研究者たちは〈参加する市民^{パーティシペーティングシティズン}〉の一人一人の〈主観的現実と社会的空間^{サブジェクティブリアリティ ソーシャルスペース}〉—〈森版・シュッツ〉論のキーワード—に着目した社会学、〈一人称単数のパースペクティブ〉の〈リアリティ〉構成の社会学、いわゆる〈現象学的社会学 phenomenological sociology〉〔社会現象学 social phenomenology と同じ〕の布^フ地^チで出来^{出来}た^たエスノメソドロジー、会話分析、生活史分析、物語論などの〈帽子^{シャッポ}〉を被^被り、〈新しい語彙^{ジャーゴン}〉を用いながら、〈社会や人間〉について何事かを〈語り出し〉はじめている。各表の数字から見えるシュッツ像の外形的な特徴点は以上のような³⁾。

3. 日本におけるシュッツ研究—揺籃期からシュッツ生誕百年（1999年）まで

次に、以上の1. と2. を念頭において「日本におけるシュッツ研究の歴史」について述べてみたい。日本におけるシュッツ研究の60年—その揺籃期からシュッツ生誕百年の1999年まで—を振り返るとき1. で指摘した「2つのタイプのシュッツ研究」—ワグナー型とバーバー型—を〈研究業績〉として生み出すことがな^なか^かった^{った}という〈消極的〉意味において、それは〈ある独特な研究の歴史〉を歩んでいる。〈ある独特な研究の歴史〉とはどのような歴史であるか。2. で指摘したシュッツ研究の蓄積から「日本におけるシュッツ研究の足跡」を知ることができよう。その足跡に5つの〈年代〉が区別できる。①1960年代—シュッツ研究の揺籃期 ②1970年代—哲学や文化人類学などの社会学の関

連分野をも加えた、シュッツ理論の先駆的研究が開始される時期 ③1980年代—『シュッツ著作集』の翻訳刊行等によるシュッツ理論の研究が前進する時期。④1990年代—シュッツ研究の諸成果がさまざまな形で開花する時期 ⑤2000年代—新しい研究段階を迎えている時期。1999年「シュッツ生誕百年」を記念して「アルフレッド・シュッツの遺産」〈The Legacy of Alfred Schutz〉をめぐる〈国際シンポジウム〉が早稲田大学はじめドイツ（コンスタンツ大学）やアメリカ（オレゴン大学）で開催され、研究者相互の国際交流を介して「日本におけるシュッツ研究」も新しい研究段階を迎える。電子出版によるジャーナル『シュッツ研究』*Schutzian Research: A Yearbook of Mundane Phenomenology and Qualitative Social Science*の刊行（Editor-in-Chief: Michael Barber）が現在（2007）予定されており、シュッツ研究の〈グローバル化〉が一挙に加速する勢いにある。

3-1 揺籃期—青山版〈ウェーバー=シュッツ〉論

1960年代—私がまだ学生・院生の頃—この時期には森元孝（2000）『ウィーンのアルフレート・シュッツ』のような優れたシュッツ〈研究書〉もシュッツの〈翻訳書〉もなにもなかった。1964年、日本を代表する社会学者たちが一堂に会して『マックス・ウェーバー生誕百年』の記念シンポジウムが開かれ、日本の「マックス・ウェーバー研究」はその頂点に達した。ウェーバー研究書が沢山刊行される中で青山秀夫（1950）『マックス・ウェーバーの社会理論』岩波書店が目にとまった。「ウェーバーの『理念型』論は私たちの『日常経験』のなかにその胚珠をもつ」という青山版〈ウェーバー=シュツ

ツ」論をこの本で知ったのである。私は本当に驚いた。どうして？ 60年代の〈社会科学の主流〉をなす新カント学派の〈ものの見方〉では「日常経験の世界はカオスの世界、混沌と無秩序の世界である」というものであった。マックス・ウェーバーやタルコット・パーソンズはこのような^{エピステモロジー}〈ものの見方〉にたって「社会学理論」を展開していた。これに対して青山版〈ウェーバー・シュッツ〉論は社会科学の研究对象である日常経験の世界、人間の社会的行為の世界は〈つねにすでに〉〈意味づけられている秩序〉であるということから出発する。天と地がひっくり返るほどの〈ものの見方〉の転換である。これは面白い考え方だと私は思った⁴⁾。

ウェーバー、デュルケムとパーソンズそしてマルクス。この三人ないし四人の巨匠たちが社会学理論の首座を占めていた60年代において、兎も角、青山秀夫の〈ウェーバー・シュッツ〉論は〈卓抜〉であった。直接学んだ私の先生・先輩からの影響は別として、私のシュッツ研究の端緒は、振り返れば、青山版〈ウェーバー＝シュッツ〉論にあったことになる。^{オルタナティブス}〈もうひとつ〉の社会学の方へうつすとした〈開眼〉である。

3-2 1970年代：シュッツ理論の先行研究— 〈バーガー＝ルックマン〉のリアリティ論

1970年代、バーガー＝ルックマン著／山口節郎訳（1972）『日常世界の構成』[現実の社会的構成 *The Social Construction of Reality* 1966] は、シュッツ社会学の理論を知る上で最もポピュラーな研究案内書であり、若い学生や院生たちに強い影響力を及ぼした⁵⁾。私も読んだ。〈バーガー＝ルックマン〉のリアリティ論には2つの点で興味がもてた。1つは、行為主体（意識）による

リアリティコンストラクション

〈現実構成〉の局面に力点を置く見方、2つは社会学の「理論的概念枠組みや理論的イデオロギー」よりも、社会学理論の概念枠を支える「日常の常識的知識に注目する」見方である。この見方は〈大学紛争〉の最中を生きる当時の〈若い世代〉の〈生活実感〉と、どこか共鳴・共振するところがあった。机や椅子を築きあげ、教室に〈立て籠もる〉極端にアクティブな^{パーテシペーティングスチューデント}〈参加する学生たち〉の心情を〈子供じみた〉^{カリカチュア}戯画と見る・見ないは別として、〈怒れる学生たち〉は〈エスタブリッシュメント〉や〈権威ある大人〉をすべて^{ラディカル}〈根っこ〉から〈気分的〉に拒否するところがあった。勿論、若い世代は〈エスタブリッシュメント〉に代替するものを当時にも〈見出し〉えてはいなかったが。この〈バーガー＝ルックマン版〉シュッツ論と先の青山版〈ウェーバー＝シュッツ〉論を合わせて見えてくるもの、これを〈わたくしなりのことば〉に表現すなら〈身の丈を生きる〉人間の^{ブリックヴェンズンク}〈まなざし〉を社会学に「取り戻す」—当時の流行語で言い表すなら〈復権〉する—Bring men back in sociology—ということになる。それは〈アイデンティティ〉探し、世の中に自分の〈居場所〉を^{ビーイング}〈探す〉^{クレスト}ことにつながる。

話は少し横道に入る。1970年代の乏しい情報のなかで、私などが〈主観的に〉思い描いた「アルフレッド・シュッツ」のリアリティ像は全く単純なものであった。「生前の著作は『社会的世界の意味構成』*Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt* (1932, Wien) ただ1冊—注意！1960年に第2版が刊行された—、それにシュッツの弟子たちが編んだ遺稿論文集 *Collected Papers*, 3Vols.『著作集3巻』—Ⅰ（1962）Ⅱ（1964）Ⅲ（1975）—の亡命ユダヤ系アメリカの社会学者」という人物像である。

シュッツは〈ハンディ〉な研究者であると誤認⁶⁾したことが、この誤認が、その後の私の研究生活を決定することになる。多作なパーソンズ、ウェーバーやマルクスのような社会学史における達人たちとは異なり、シュッツは何とかなると、怖いもの知らずにシュッツに飛びついたのである。注6に記したように、今後も刊行が予定されている諸著作、加えて『シュッツ＝グールヴィッチ往復書簡1939-1959』（翻訳あり）や『シュッツ＝ヴェーゲリン往復書簡』（翻訳なし）などの「書簡集」の存在という〈客観的現実〉を知るに至った今日、それでも怯まずに「猪突猛進できるだろうか」。要するに、1970年代はシュッツ理論をめぐる周囲の研究状態はまったくの手探りの〈星雲状態〉にあった。

3-3 1980年代：「シュッツ研究」の深まり：

1980年の暮、日本におけるシュッツ研究の「書評」、もっと正確には、シュッツの翻訳書についての書評が『週間読書人』12月22日号に掲載された。書評担当者は副田義也（筑波大学）である。副田は1980年を回顧して「収穫の豊かな一年」であり「長年にわたる研究成果が目立つ」と大書して、青井和夫、南博、テオドル・アドルノ等に加え、アルフレッド・シュッツを〈顔写真入り〉で論評した。副田は、まず、「理論、学説」では、南博『人間の行動学』青井和夫『小集団の社会学』浜島朗『ウェーバーと社会主義』中久郎『デュルケムの社会学理論』徳永洵『社会思想史』の五人の業績についての解説と評価を行い、ついで…「このほか、翻訳では、A・シュッツの『現象学的社会学』浜日出夫・森川喜代志訳、『現象学的社会学の応用』桜井厚訳、さらに、かれとT・パーソンズの往復書簡である

W・M・スプリンドン編『社会理論の構成』佐藤嘉一訳が出揃い、かれの影響の深まりを印象づけた」と記した。シュッツ理論の「研究成果」ではなく、シュッツの翻訳書が「書評」の対象になった点に注目すべきである。

そのシュッツ「理論」に対する当時の反響は、どのようなものであったか。一例として

「シュッツ＝パーソンズ往復書簡」に対する当時の反響について述べる。『シュッツ＝パーソンズ往復書簡—社会的行為の理論』[英語版：The Correspondence of Alfred Schutz and Talcott Parsons: The Theory of Social Action Ed. Richard Grathoff, 1978. ドイツ語版：W.M.Sprondel (1977) Hrsg., Alfred Schutz Talcott Parsons Zur Theorie des Sozialen Handelns: Ein Briefwechsel. Suhrkamp. 邦訳名は『社会理論の構成』を「書評」して、厚東洋輔（大阪大学）は一同年1980年8月11号の『読書新聞』において「パーソンズの〈構造機能分析〉とシュッツの〈現象学的社会学〉の間の理論論争」として紹介し、この論争の「対立点」は「あまりにも明確、討論の〈早産〉を証し^{ママ}出るもの」と述べた。厚東は2人の間の論争点を次のように要約する。

—シュッツは…パーソンズの提唱した「行為の主意主義的理論」について、社会科学と経験的事実との構造的同型性（傍点は佐藤）という最奥の次元から、多分提唱者（パーソンズ＝佐藤）よりももっと首尾一貫した形で、その輪郭を描き出し、その上でシュッツは一転して、パーソンズの定式化の不十分さ（傍点は佐藤）を七つの論点に分け、鋭く追及する。シュッツのパーソンズに対する批判は、主意主義的行為理論における主観的見地の不徹底性（傍点は佐藤）に尽きるのではないかと思われる。この論点は、二重である。まず、社会科学において主観的見地に依拠すること

がなにゆえに必要かという、基礎づけの情弱性の指摘、いま一つは、「パーソンズ教授は実際には行為の主観的範疇を分析せず、むしろ行為者の主観的見地を科学的に記述するための客観的諸範疇を分析しているのである」という意図と成果の齟齬の指摘、つまりパーソンズは、認識論・方法論という哲学的基礎および理論的範疇という概念体系の二面から批判にさらされる。こうした批判は、鋭く、傾聴に値する。

パーソンズ社会学理論の全盛の時代である。ヴェバーリアンの厚東は、シュッツのパーソンズ批判を「傾聴に値する」と書評したが、その反対極として「傾聴に値しない」という書評も現われた。その代表的なものは、同年の『日本読書新聞』8月16日号に掲載された書評「ウェーバー継承の2潮流—客観分析と現象学的分析の論争を記録」である。この「書評」の結論は「われわれ日本の読者は、本書を読んだのち、いずれかに味方して代理戦争を展開する（それも結構であるが）よりも、文化的背景を異にするものの相互の違いと、両者の交流のあり方について深く考えることが何より有益であろう」であった。

このパーソニアン¹の書評子の発言は、私見によれば、両義的である。一方において書評子はシュッツの提出した理論問題—〈社会的行為〉の理論の「哲学的基礎づけ」が必要であり、また「その基本範疇」の明確化が必要であるという2つの理論問題、方法論的前提問題と概念体系問題—を、客観分析（パーソンズ）の方が正しいか、それとも現象学的分析（シュッツ）の方が正しいか、という〈あれかこれか〉の二者択一の問題として受けとめてしまっている。当然書評子の結論は〈消極的否定的〉である。昔シュッツとパーソンズの間で交わされたこの〈論争〉を今また

〈再燃した〉ところでどうなるか、それも「結構である」が、新味は出まい。この「翻訳書」は過去の「論争の記録」にすぎない。

いったん〈あれか＝シュッツか〉〈これか＝パーソンズか〉の理論の二者択一の問題として〈自らの前に〉立てた課題を、書評子はこのように「不問」にした後、今度は〈第三者の立場〉から「文化背景を異にするものの違い」と「両者の交流のありかた」問題へと〈論点〉を移し変える。書評子の〈咄嗟の思いつき〉とも言える「両者の交流のありかた」問題への変更は、しかし、結局のところ、シュッツがパーソンズに〈問いかけた〉事柄そのものの別表現にすぎない。社会学の〈理論問題〉の背後には、つねに既に「日常的生活世界」（＝シュッツ）「文化背景」（＝書評子）という前科学²的〈意味領域〉が横たわっている。従って、「社会理論と社会的生活世界の間の関係を問題にしてみる必要がある」（＝シュッツ）。従って「〈文化背景〉や〈両者のあり方〉を考えてみる必要がある」（＝書評子）。パーソニアンの書評子は、シュッツの問題を一方で「否定」しながら、他方で「シュッツの問題提起の世界」へと自分の問いの姿勢を〈無意識のうち〉に〈同調〉させている。パーソンズの「社会的行為の構造」（＝主意主義的行為）の理論に問いかけたシュッツの〈理論問題〉の構図—青山版〈ウェーバー＝シュッツ〉論—は、すんなりとは受容されず、この書評子の例にみるように、凍結され〈放置〉される。

副田の発言「シュッツの影響の深まり」は「二重の意味」を帯びる。1つは、日本におけるシュッツ研究は80年以降「日本語でシュッツが読める時代が到来した」という意味での「シュッツの影響の深まり」。もう1つは、厚東の

「書評」に見られる〈社会学理論〉にたいするシュッツの問題提起が「傾聴に値する」とする〈影響〉の深まりである。この後者の意味での「シュッツ理論の深まり」は必ずしも〈直線的〉に進行せず、80年代以後も緩慢な歩み、ジグザグのコースをたどる。—ここでは触れることはできないが、シュッツの現象学的社会学の影響を受けた、アメリカの〈新しい社会学〉の動向やルーマンやハーバーマスなどの理論の動向などについても当然、この脈絡において顧慮されて然るべきである〔表1や表2を参照〕。

要約すれば、80年代もそれ以後もシュッツ理論の〈翻訳〉作業が一步先行し、シュッツ理論の〈本格的〉研究のほうは二、三步後を追う形をとる。〈本格的〉シュッツ理論の研究は、その発端から日本の理論社会学の〈支配的〉諸潮流との〈論争的〉〈対抗的〉〈異議申し立て的〉文脈の中に〈挿入^{インボーズ}〉されることになる⁷⁾。

3-4 『社会的世界の意味構成』と広松渉 「社会的行為の理論ノート」

1980年代から90年代にかけてシュッツの翻訳作業は前進した。「日本語でシュッツが読める時代がきた」という意味での「シュッツの影響」の〈深まり〉は一層現実のものとなった。

—1982年シュッツの著『社会的世界の意味構成』が訳出され、『アルフレッド・シュッツ著作集』全3巻も次々に訳出される。M・ナタンソン編／渡部光・那須壽・西原和久訳『社会的現実の問題〔I〕』1983.3, 西原和久訳『社会的現実の問題〔II〕』1985.4（以上英語版第一巻）、A・ブローダーセン編／渡部光・那須壽・西原和久訳『社会学理論の研究』1991.11。（英語版第二巻）I・シュッツ編／渡部光・那須壽・西原和久訳『現象学的哲学の研究』1998.7。（英語版第三巻）、さらにアル

フレッド・シュッツ著／R・M・ゼイナー編／那須壽・浜日出夫・今井千恵・入江正勝訳『生活世界の構成—レリヴァンスの現象学』1996.5, リヒャルト・グラートホフ編著／佐藤嘉一訳『亡命の哲学者たち』1996.9. 等々である。

他方、翻訳作業の進行とともに、シュッツ理論の〈本格的〉研究も進展する⁸⁾。哲学者の故広松渉が『現代思想』誌に1986年4月号から1989年10月号にかけて、全17回、3年6ヶ月にわたって「社会的行為論ノート」を連載したことは、記憶に新しい—のちに、この「社会的行為論ノート」が広松渉『現象学的社会学の祖型：A・シュッツ研究ノート』（1991）青土社として出版される—。この広松のシュッツ研究は、日本における60年余の「シュッツ研究」の歴史のなかでも〈翻訳的〉深まりと〈理論的〉深まりという2つの意味において特筆されるべきものがある。

広松自身「本書が、シュッツに関する主題的研究書としては本邦最初のもの」と記し、広松自身の構想する『存在と意味』—〈ヘーゲル＝マルクス〉的存在論—の見地から〈ウェーバー＝シュッツ〉問題を「社会哲学的な」〈準位〉で批判的に検討に付したのである。「理解社会学に哲学的基礎づけを与える」シュッツの根本態度に倣って、広松もシュッツの現象学的社会学の哲学的基礎づけについて問い直す〈哲学的〉作業である。広松の結論は、シュッツの試みが「あの超越論的自我群のモノドロギー、つまり個人実体主義に安住して」おり、「今日、現象学の社会的行為理論への導入は、フッサールの強い内面的個人主義からして、個人主義のディレンマを解決しえない」であった。シュッツ理論に下した広松の結論は、〈哲学的基礎づけ〉問題の〈地平〉を「生活世界」に向けて〈切り開いた〉—天上の世界から地上の〈生〉の世界へと下

向する—シュッツ理論の斬新さとは〈裏腹〉の、これを〈フッサールの超越論的モナドロジー〉へと幽閉し、「生の世界」との接続を遮断する地点で収束する。「あれ！これでいいのかなあ？」〈広松＝シュッツ〉論を読み終わった時点で、この結論に対してなんとも奇異な印象を抱いたことを私は覚えている—広松教授に反論しなさいよ、と周囲の人たちはうるさく迫るのだが、しっかりした反論の根拠を当時は見出しえなかった。広松に対する筆者の見解については『改訂版 社会的世界の意味構成—理解社会学入門』（2006）の「改定版の序」10-19頁などを参照—。しかし〈広松＝シュッツ〉論から学ぶ必要があるのは、その〈テキスト・クリティーク〉の厳密さと徹底性である。訳者の私は〈広松＝シュッツ〉の脚注欄に記された数々の〈語義解釈〉や〈文節〉の瞠目すべき読解に出会うたびに、身震いし、顔も紅潮して、全くその通りだと感じ入ったのである。このとき「翻訳」とは一つのテキストに向って〈意味解釈〉する〈創造〉の営みでもあることを改めて悟ったのである。

3-5 本格的「シュッツ研究」としての『アルフレート・シュッツのウィーン』

1995年、日本におけるシュッツ研究の成果として、世界に誇れる作品が世に出た。森元孝『ウィーンのシュッツ』748頁、400字原稿用紙にして2,000枚の大著である。『モダンを問う』のなかで森は『アルフレート・シュッツのウィーン』についてこう記している。

—「リュックサックに、マイクロ・レンズをつけた一眼レフカメラ、8ミリ・ビデオ、大量のフィルム、それにノート・パソコンをつめて、資料をみに行こう。それと必要な外国語は外国語である限り、いつまでも習い続ける必要がある」（253

頁）。新しいスタイルの本格的な「シュッツ研究」の登場である。—「社会調査に対して理論研究を対立的に区別する傾向があるが、…「理論社会学」「社会学理論」「社会理論」「社会学史」などと呼ばれている行いが、社会調査とは対立する行いのように捉えられる傾向がある」が、それは違うのではないか。本格的社会学の理論研究にはもう一つのオルタナティヴスがある。「**原資料を読みにいこう**」。こうして完成したのが『アルフレート・シュッツのウィーン』である。ドイツのコンスタンツ大学にはアルフレート・シュッツ記念アルヒーフ Alfred Schütz-Gedächtnis-Archiv というところがあり、シュッツの草稿類やウィーン時代からの蔵書類も所蔵されている。—「自分の足で、そして自分の手で丹念に史料類を集めることである」。

自分の足で、そして自分の手で丹念に史料類を集めること、それを裏地にして社会理論の〈詩絵〉を編むこと。この社会学的研究のための行為の〈準則〉は「マックス・ウェーバーの理解社会学を哲学的に基礎づける」というアルフレッド・シュッツの主張する〈現象学的社会学〉の方法論の〈準則〉、社会理論の裏地としての〈日常の生活世界〉の構造に着眼すること、理論家が〈身の丈を生きる〉生活者の目をもつことの主張につながる。同時代人や先人の居所へ、史料のあるところへ〈飛んで行こう〉。そして現場を押さえよう。なんともうらやましい軽快なフットワークである。「リュックサックに、マイクロ・レンズをつけた…」。〈皮肉〉っているのではない。日本におけるシュッツ研究がようやくここまでたどり着いたのである。〈青山版＝シュッツ＝ウェーバー〉から45年目の快挙である⁹⁾。

以上、①②③④および⑤と5つに時期区分し

て、それぞれの時期における日本のシュッツ研究の特徴を掻いて素描した。①揺籃期における〈青山版＝ウェーバー＝シュッツ研究〉②70年代のバーガー＝ルックマン版シュッツ論の〈先駆性〉、③80年代の「社会的行為の理論」をめぐる〈パーソンズ＝シュッツ〉論争の〈波紋〉、続いて④〈広松版＝シュッツ論〉の〈波紋〉、⑤90年代の〈森版＝シュッツ研究〉の軽快なネットワーク。

4. 日本におけるアルフレッド・シュッツ研究の問題点—〈日本のシュッツ研究〉をシュッツに倣って現象学〈する〉—

そこで以上 3. で述べた事柄を頭に置きながら、最後に、日本におけるアルフレッド・シュッツ研究の〈問題点〉について〈感ずるままに〉述べることにする。2つのこと、1つはアルフレッド・シュッツの理論研究について、もう1つはアルフレッド・シュッツの応用研究について。

4-1 日本におけるアルフレッド・シュッツの理論研究の問題点

「リュックサックに、マイクロ・レンズをつけた一眼レフカメラ、8ミリ・ビデオ、大量のフィルム、それにノート・パソコンをつめて、資料をみに行こう。それと必要な外国語は外国語である限り、いつまでも習い続ける必要がある」。日本におけるシュッツの〈本格的〉研究は、ここで一挙にシュッツの個々の「著作」の個別的研究から、その「生きられた社会的世界」との関わりの問題—社会と作品との〈意味連関〉の解明の問題へと、その研究の重心が移行したのである。この〈森版＝シュッツ〉タイプの研究から多くのこ

とを〈学べる〉、いや〈学ぶこと〉が必要であるとともう。

第1に、日本の学問の〈伝統〉のなかでは〈森版＝シュッツ〉タイプの学説研究—理論学説を現地調査にもとづいて考証するという、一種の学説と生活史との総合研究—は、どちらかといえば〈育ち〉にくかった。遠い外国まで出かけていって、このような総合研究を手がける〈ゆとり〉がなかったし、またそのような心の準備もなかった。アルフレート・シュッツのように、ドイツ語や英語で手紙や論文を書き、人生の〈3分の2〉をヨーロッパ、〈3分の1〉をアメリカ合衆国で〈過ごした、過ごさざるをえなかった〉亡命外国人の学説研究については、特にこのことがいえる。〈遠い東^{ファー・イースト}〉に住む日本人がウィーンやパリやニューヨークに出かけていって簡単に〈現地調査〉するわけにはいかない。

第2に、日本におけるシュッツ研究の歴史をたどって気づいたことが1つある。アメリカ移住後の〈後期シュッツ〉に関心をよせるタイプの〈研究者〉が比較的多いの、ヨーロッパ在住時代の〈初期シュッツ〉に関心を寄せるタイプの〈研究者〉が少ないことである。『アルフレート・シュッツのウィーン』はこの〈数少ない〉初期シュッツ研究のなかの1つである—同著者には『フリードリヒ・フォン・ハイエクのウィーン』(2006)新評論もある—。〈初期シュッツ〉研究と〈後期シュッツ〉研究との間に〈アンバランス〉がみられるのはなぜだろう。ドイツ語文献が日本の文献市場ではあまり〈目立たない〉のかもしれない。しかし〈目立たない〉ことと〈文献が存在しない〉ことと同義ではない¹⁰⁾。国際語としての〈ドイツ語〉の影響力の問題、〈言語の支配〉という前科学的〈生活世界〉の問題が日本のシュッツ研究の〈隠れた〉要因の1

つにあるのかも知れない。シュッツ理論の〈全体像〉の復元は、ドイツ語圏の〈前期シュッツ〉と英語圏の〈後期シュッツ〉の〈アンバランス〉を解消する「足腰の強い」読み手の登場が期待されるということになろう。

第3に、3. でみたように、日本におけるシュッツ研究はシュッツの「生活史」研究から始まったのではなかった。社会的行為理論（「理解社会学」）の〈哲学的基礎づけ〉という理論問題を中心に回転した。彼の書き残した〈著作〉の翻訳に始まり、その著作の〈読解〉の年輪がこれまで刻まれてきたのである。反面、シュッツがウィーンからパリを経てニューヨークへと移住する〈波乱に満ちた〉その〈生涯の歴史〉に対する〈関心〉は、シュッツ研究の後景に退き、つねに〈地平化〉していた。『シュッツ＝パーソンズ論争』が翻訳され、『社会的世界の意味構成』が翻訳される。続いて、その著作の〈是非〉をめぐる〈いきなり〉強い調子の〈議論〉が開始される。社会科学の方法論、『シュッツ著作集：全三巻』が翻訳され、続いて〈解釈的読解〉のテキストが編まれる。

以上述べたことを〈まとめて〉みよう。3つの反省から得られる結論は「シュッツの理論は彼の生活史の〈コンテキスト〉の中で〈読み直す〉必要がある」である。

この講義の〈初めに〉〈アドヴァンスト・コース〉のリーディングスとして〈ワーグナー・タイプ〉の「シュッツの伝記」と〈バーバー・タイプ〉の「シュッツの伝記」を推薦した。ここで〈もう1度〉そのバーバーの言葉を引用する。シュッツの「伝記をものすること」^{ドローイング・バイオグラフィ}、それは「シュッツの理論的作品を構成している〈客観的意味〉の下に横たわる主観的活動の〈覆い〉をとること」である。参考資料③「アルフ

レッド・シュッツの『コレスポンデンス』（1932-1959）頻度調べ」は、このバーバーの発言の〈意味合い〉を知る手がかりとなる。シュッツは〈同時代世界〉の〈伸^{ネーベンメンシエン}間〉と〈どれくらいの〉頻度と〈どのような〉内容の〈手紙〉を交換しているか。テオドル・アドルノからマリアンネ・ウェーバーまで56人の〈同時代人〉^{ツァイトゲノッセ}との多彩な〈交友〉関係の記録が残されている。さらに参考資料④はその一例として「36アロン・ゲールヴィッチ」との〈往復書簡〉の内容を一覧したものである。「生活史」関連の諸項目―パスオロジー・家族・子どもと親・夫人・友人など―と「学問論」関連の諸項目―ファバー・フッサール・ジェームズ・現象学・意識・意識野・ノエマ・ノエシス・生活世界・レリヴァンス―とを同時に一覧できるようにまとめてみたものである¹¹⁾。

翻って「日本におけるシュッツ研究」は〈客観的意味〉としての「作品」を〈読む〉こと^{ジンドエトツク} [意味解釈] に集中した。これらの「作品」の〈客観的意味〉の背後に潜む、シュッツの〈主観的意味〉^{ジンゼツツク} [意味措定] の世界、〈同時代人〉との〈間主観的〉な交流 [手紙の交換] といったシュッツの〈日常世界〉の膨大な〈知識のストック〉に〈蓋をしたまま〉、いってみれば、いまこの^{コンテキスト} 状況から〈自由な〉、状況に〈とらわれない〉読み [=客観的意味解釈] の世界を〈生きた〉のである。

私たちは日本におけるシュッツ研究の〈成り行き〉から沢山のことを学んだ。〈今・以前〉のシュッツ研究から大いに学んだことを〈今・以後〉のシュッツ研究に生かしたいとおもう。そのために〈問題点〉を引き出すのである。

この点について作家の大江健三郎は面白いことを述べている。作品を〈読むこと〉^{リーディング}と作品を

参考資料③ アルフレッド・シュッツの『コレスポンデンス』（1932-1959）頻度調べ

1 T・アドルノ1940-40	2	29 リーツラー1948	1
2 G・オルボー 1942	1	30 ルイス・ルギール1945	1
3 R・アロン1942-49	6	31 タモツ・シプタニ1952	1
4 L・アンツ1940-	3	32 エドワード・シルズ1954	1
5 H・ベッカー 1952	1	33 エルサ・スタウディングー 1947	1
6 R・ボエーム1959	1	34 アンドレアス・ワルター？	1
7 G・ブリーフス1940	2	35◆マーヴィン・ファーバー 1939-1959	218
8 D・ケアンズ1941-42	4	36◇アロン・グールヴィッチ1939-1959	ca200
9 H・フェルス1940-50	8	37◇フェリクス・カウフマン1930-1945	47
10 R・インガルテン1958-59	3	3◆M・ナタンソン1951-1959	109
11 H・ヨナス1954-56	10	39 ファン・ブレダ（ファーバーから）1947	1
12 H・カレン1940-56	8	40 オエゲン・フィンク1932-1934	15
13◇H・ケルゼン1942-45	5	41◇フレューリヒ1940-1959	59
14 J・ラメール1949	2	42◆ハロルド・ガーフィンケル1949-1958	17
15 ケネス・パーク1952	1	43◇G・ハーベラー 1940-1958	37
16 ルイス・コーザー 1956	1	44◆アーヴィン・ジョンソン1950-58	31
17 フィンケルシュタイン1939-54	2	45 ヘルムート・クーン1942-1945	19
18 フリッツ・カウフマン1958	1	46 ローヴィー 1942-1956	10
19 モリス・マンデルバウム？	1	47 ルイス・ロラサン・ジヒュス1942-1958	13
20 ウィルバート・ムア1952	1	48 R・コリンズ1948-48	3
21 クルト・ゴルトシュタイン1953	1	49◆H・シュビーゲルバーグ1940-19 [64?]	39
22 O・モルゲンシュテルン1954	1	50◇ハイエク1936-57	39
23 R・K・マッケオン1952	1	51 ハワード・ホワイ特1952	1
24 ロバート・マートン1940	1	52◇アルバート・ザロモン1942-1959	58
25 カスパー・ネゲーロ？	1	53◇エリック・フェーゲリン1938-1959	231
26 ムニッツ1950	1	54 ウィルソン学部長1955	1
27◇尾高朝雄1953	1	55 マリアンネ・ウェーバー 1932	2
28◇マハルプ1934-1958	190	56◆クルト・ウォルフ1945-1959	70

◇ウィーン時代から親交のあったもの ◆アメリカへ亡命後親交のあったもの

〈GEIST-KREIS〉のメンバー：オトマール・シュパンの思想「身分制国家の創造」に反対して結成した自由主義的傾向の青年結社：1938年まで25人のメンバーを数える。ハイエク、フェルス、ハーベラー、フェーゲリン、フリッツ・マハルプ、オスカー・モルゲンシュテルン、アルフレッド・シュッツ、フェリクス・カウフマンなどはこの「ガイスト・クライストの仲間達であった。

参考資料④

『シュッツ=グーレイツチ往復書簡』と「互いにDuと呼び合う関係」の形成過程

1938.8.5-1950.2.4までの85通の「往復書簡」から

手紙		A「生活史」関連の事項															B「学問論」関連の事項																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	
紙	部	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	aa	ab	ac	ad	ae	af	ag	ah	ai	aj	ak	al	am	an	ao	ap	aq	ar	as	at	au	av	aw	ax	ay	az	ba	bb	bc	bd	be	bf	bg	bh	bi	bj	bk	bl	bm	bn	bo	bp	bq	br	bs	bt	bu	bv	bw	bx	by	bz	ca	cb	cc	cd	ce	cf	cg	ch	ci	cj	ck	cl	cm	cn	co	cp	cq	cr	cs	ct	cu	cv	cw	cx	cy	cz	da	db	dc	dd	de	df	dg	dh	di	dj	dk	dl	dm	dn	do	dp	dq	dr	ds	dt	du	dv	dw	dx	dy	dz	ea	eb	ec	ed	ee	ef	eg	eh	ei	ej	ek	el	em	en	eo	ep	eq	er	es	et	eu	ev	ew	ex	ey	ez	fa	fb	fc	fd	fe	ff	fg	fh	fi	fj	fk	fl	fm	fn	fo	fp	fq	fr	fs	ft	fu	fv	fw	fx	fy	fz	ga	gb	gc	gd	ge	gf	gg	gh	gi	gj	gk	gl	gm	gn	go	gp	gq	gr	gs	gt	gu	gv	gw	gx	gy	gz	ha	hb	hc	hd	he	hf	hg	hh	hi	hj	hk	hl	hm	hn	ho	hp	hq	hr	hs	ht	hu	hv	hw	hx	hy	hz	ia	ib	ic	id	ie	if	ig	ih	ii	ij	ik	il	im	in	io	ip	iq	ir	is	it	iu	iv	iw	ix	iy	iz	ja	jb	jc	jd	je	jf	jj	jk	jl	jm	jn	jo	jp	jq	jr	js	jt	ju	jv	jw	jx	ky	kz	la	lb	lc	ld	le	lf	lg	lh	li	lj	lk	ll	lm	ln	lo	lp	lq	lr	ls	lt	lu	lv	lw	lx	ly	lz	ma	mb	mc	md	me	mf	mg	mh	mi	mj	mk	ml	mm	mn	mo	mp	mq	mr	ms	mt	mu	mv	mw	mx	my	mz	na	nb	nc	nd	ne	nf	ng	nh	ni	nj	nk	nl	nm	nn	no	np	nq	nr	ns	nt	nu	nv	nw	nx	ny	nz	oa	ob	oc	od	oe	of	og	oh	oi	oj	ok	ol	om	on	oo	op	oq	or	os	ot	ou	ov	ow	ox	oy	oz	pa	pb	pc	pd	pe	pf	pg	ph	pi	pj	pk	pl	pm	pn	po	pp	pq	pr	ps	pt	pu	pv	pw	px	py	pz	qa	qb	qc	qd	qe	qf	qg	qh	qi	qj	qk	ql	qm	qn	qo	qp	qq	qr	qs	qt	qu	qv	qw	qx	qy	qz	ra	rb	rc	rd	re	rf	rg	rh	ri	rj	rk	rl	rm	rn	ro	rp	rq	rr	rs	rt	ru	rv	rw	rx	ry	rz	sa	sb	sc	sd	se	sf	sg	sh	si	sj	sk	sl	sm	sn	so	sp	sq	sr	ss	st	su	sv	sw	sx	sy	sz	ta	tb	tc	td	te	tf	tg	th	ti	tj	tk	tl	tm	tn	to	tp	tq	tr	ts	tt	tu	tv	tw	tx	ty	tz	ua	ub	uc	ud	ue	uf	ug	uh	ui	uj	uk	ul	um	un	uo	up	uq	ur	us	ut	uu	uv	uw	ux	uy	uz	va	vb	vc	vd	ve	vf	vg	vh	vi	vj	vk	vl	vm	vn	vo	vp	vq	vr	vs	vt	vu	vv	vw	vx	vy	vz	wa	wb	wc	wd	we	wf	wg	wh	wi	wj	wk	wl	wm	wn	wo	wp	wq	wr	ws	wt	wu	wv	ww	wx	wy	wz	xa	xb	xc	xd	xe	xf	xg	xh	xi	xj	xk	xl	xm	xn	xo	xp	xq	xr	xs	xt	xu	xv	xw	xx	xy	xz	ya	yb	yc	yd	ye	yf	yg	yh	yi	yj	yk	yl	ym	yn	yo	yp	yq	yr	ys	yt	yu	yv	yw	yx	yy	yz	za	zb	zc	zd	ze	zf	zg	zh	zi	zj	zk	zl	zm	zn	zo	zp	zq	zr	zs	zt	zu	zv	zw	zx	zy	zz
紙	部	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	aa	ab	ac	ad	ae	af	ag	ah	ai	aj	ak	al	am	an	ao	ap	aq	ar	as	at	au	av	aw	ax	ay	az	ba	bb	bc	bd	be	bf	bg	bh	bi	bj	bk	bl	bm	bn	bo	bp	bq	br	bs	bt	bu	bv	bw	bx	by	bz	ca	cb	cc	cd	ce	cf	cg	ch	ci	cj	ck	cl	cm	cn	co	cp	cq	cr	cs	ct	cu	cv	cw	cx	cy	cz	da	db	dc	dd	de	df	dg	dh	di	dj	dk	dl	dm	dn	do	dp	dq	dr	ds	dt	du	dv	dw	dx	dy	dz	ea	eb	ec	ed	ee	ef	eg	eh	ei	ej	ek	el	em	en	eo	ep	eq	er	es	et	eu	ev	ew	ex	ey	ez	fa	fb	fc	fd	fe	ff	fg	fh	fi	fj	fk	fl	fm	fn	fo	fp	fq	fr	fs	ft	fu	fv	fw	fx	fy	fz	ga	gb	gc	gd	ge	gf	gg	gh	gi	gj	gk	gl	gm	gn	go	gp	gq	gr	gs	gt	gu	gv	gw	gx	gy	gz	ha	hb	hc	hd	he	hf	hg	hh	hi	hj	hk	hl	hm	hn	ho	hp	hq	hr	hs	ht	hu	hv	hw	hx	hy	hz	ia	ib	ic	id	ie	if	ig	ih	ii	ij	ik	il	im	in	io	ip	iq	ir	is	it	iu	iv	iw	ix	iy	iz	ja	jb	jc	jd	je	jf	jj	jk	jl	jm	jn	jo	jp	jq	jr	js	jt	ju	jv	jw	jx	ky	kz	la	lb	lc	ld	le	lf	lg	lh	li	lj	lk	ll	lm	ln	lo	lp	lq	lr	ls	lt	lu	lv	lw	lx	ly	lz	ma	mb	mc	md	me	mf	mg	mh	mi	mj	mk	ml	mm	mn	mo	mp	mq	mr	ms	mt	mu	mv	mw	mx	my	mz	na	nb	nc	nd	ne	nf	ng	nh	ni	nj	nk	nl	nm	nn	no	np	nq	nr	ns	nt	nu	nv	nw	nx	ny	nz	oa	ob	oc	od	oe	of	og	oh	oi	oj	ok	ol	om	on	oo	op	oq	or	os	ot	ou	ov	ow	ox	oy	oz	pa	pb	pc	pd	pe	pf	pg	ph	pi	pj	pk	pl	pm	pn	po	pp	pq	pr	ps	pt	pu	pv	pw	px	py	pz	qa	qb	qc	qd	qe	qf	qg	qh	qi	qj	qk	ql	qm	qn	qo	qp	qq	qr	qs	qt	qu	qv	qw	qx	qy	qz	ra	rb	rc	rd	re	rf	rg	rh	ri	rj	rk	rl	rm	rn	ro	rp	rq	rr	rs	rt	ru	rv	rw	rx	ry	rz	sa	sb	sc	sd	se	sf	sg	sh	si	sj	sk	sl	sm	sn	so	sp	sq	sr	ss	st	su	sv	sw	sx	sy	sz	ta	tb	tc	td	te	tf	tg	th	ti	tj	tk	tl	tm	tn	to	tp	tq	tr	ts	tt	tu	tv	tw	tx	ty	tz	ua	ub	uc	ud	ue	uf	ug	uh	ui	uj	uk	ul	um	un	uo	up	uq	ur	us	ut	uu	uv	uw	ux	uy	uz	va	vb	vc	vd	ve	vf	vg	vh	vi	vj	vk	vl	vm	vn	vo	vp	vq	vr	vs	vt	vu	vv	vw	wx	wy	wz	xa	xb	xc	xd	xe	xf	xg	xh	xi	xj	xk	xl	xm	xn	xo	xp	xq	xr	xs	xt	xu	xv	xw	xx	xy	xz	ya	yb	yc	yd	ye	yf	yg	yh	yi	yj	yk	yl	ym	yn	yo	yp	yq	yr	ys	yt	yu	yv	yw	yx	yy	yz	za	zb	zc	zd	ze	zf	zg	zh	zi	zj	zk	zl	zm	zn	zo	zp	zq	zr	zs	zt	zu	zv	zw	zx	zy	zz																										
1. GS	2																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	

【備考】手紙は年代の古いものから番号順に並べてある。GSはグーレイツチからシュッツ宛、SGはシュッツからグーレイツチ宛の意味。欄内のabc...ABC...等は左欄の備考を参照されたい。『往復書簡』から浮上する「相交」の中核部分である。

レ・リーディング
〈読み直すこと〉とは違う。それは〈方向性の
ない読み方〉と〈構造的な読み方〉との違いで
あるという。上で述べた〈状況から自由〉な
コンテキスト
〈シュツツ〉読みは、大江のこばに翻訳すれ
ば、〈方向性のない読み方〉である。〈シュツ
ツ〉を読み直すとは〈構造的な読み方〉をする
ことである。方向性のない・状況から自由な読
み方から、コンテキスト
〈状況の中で・構造的な読み方へと
シュツツを〈読み方〉を転換することである。

コンテキスト エゴ アルター・エゴ
〈状況〉の構造は、私と君(=もうひとりのエゴ)
ツザメン・アルテルン ゲマインシャフト
とが〈ともに老いる〉〈われわれ関係〉の〈直接
世界〉に発生し、私の視座に応じて〈同時代世
界〉・〈先代世界〉・〈後代世界〉などに〈意味変
様〉するが、それらはつねにすでに〈いま・こ
こ〉の内—世界性(=生活世界)に根ざしてい
る。シュツツが指摘するように、この内世界性
としての生活世界、日常生活世界としての〈状
況〉は、自然的態度の現象学の立場=一人称単
数の〈私〉のパースペクティブから、三つの構
造的〈契機〉が区別される。①テンポラリティ
〈時間性〉②
ローカリティ ソシアリティ
〈場所性〉③
レリヴァンス
〈社会性〉である。シュツツを〈状
況の中で・構造的な読み方〉をすることは、従っ
て、シュツツの著作や遺稿論文や手紙などの作
品類を①シュツツ自身の〈時間的視座〉=時間
意識の構造：〈今—以前〉[記憶・思い出などの過
去把持]と〈今の今〉[持続流]と〈今—以後〉
[夢・企図・幻想などの未来予持]との〈関連〉に
おいて〈読む〉：一例えば1932年以前、1932年から
1939年の間、1939年以後を〈画期〉とするシュツツの
それぞれの時間的視座から〈読み直す〉—②シュツ
ツ自身の〈場所的視野〉=トポグラフィ
の〈関連〉において〈読み直す〉：—ウィーンの
シュツツ、パリのシュツツ、ニューヨークのシュツ
ツ—そして最後に③シュツツのソシアリティ
の〈社会性〉の構
造=ウムヴェルト
〈直接世界〉のなかの親しい〈君と私〉の

ヴァー・ベツィーウング
我々関係、同時代世界の〈同時代人〉、先代
世界の〈先人〉、後代世界の〈後人〉とのレリヴァンス
〈関連〉
において〈読み直す〉。むつかしことをここで
言っているのではない。よく言われる〈いつ・
どこで・だれが・だれとなにをどうした〉に筋
目をつけることである。シュツツ独特の用語で
表現すれば、それぞれの社会関係の〈当事者た
ち〉の主観的〈リアリティ〉の形成を促す
イン・オーダー・ツウ・モティーブ ビコーズ・モティーブ
〈目的の動機〉と〈理由の動機〉相互の〈か
み合わせ〉をフォローすることである。その
〈かみ合わせ〉のフレームとしての時間性・場
所性・社会性の構造をしっかりと把握すること
である。

シュツツは「日常生活の社会学」の創設者と
いわれるが、シュツツ研究者は「これまでシュ
ツツその人の日常生活の世界が〈どのようであ
ったか〉に関心を寄せてこなかった」。

バーバーの指摘である。その昔〈青山版=シュ
ツツ・ウェーバー〉から私は学んだ。ウェー
バーの〈理念型〉の世界、〈社会科学の概念的世
界〉はジン・ハフ・テ・ア・ウ・フ・バウ
ゾツィアール・ヴェルト
〈意味を帯びた構成〉という〈社会的世界〉、
即ち〈日常の社会生活〉の中に定礎されている
こと。この〈青山版=シュツツ・ウェーバー〉
論に〈目を見張り〉〈心躍った〉。「〈もうひと
つ〉の社会学の方へうっすらと〈開眼〉した」
とも述べた。あれから、半世紀が過ぎた。「う
っすらと〈開眼〉した」その深い理由がわかつ
た。「読む」から「読み直し」へ。「うっすら」
とではなく、〈はっきり〉とシュツツ読解の仕
方に〈開眼〉したとしたいのである。

〈バーバー=タイプ〉や〈ワグナー=タイプ〉
の〈シュツツ研究〉の不在、日本におけるシュ
ツツ研究の独特な〈風土・時間・社交の構造〉
について〈シュツツに倣って〉現象学する。
〈開かれた〉シュツツ研究の頂門の一針として

お聞きいただきたい。

4-2 日本におけるアルフレッド・シュッツの応用研究について

最後に、日本におけるアルフレッド・シュッツの〈応用研究〉について簡単に述べる。この応用研究について思いつくのは、1980年に『図書新聞』のなかで副田義也が取り上げた「アルフレッド・シュッツ」の『現象学的社会学の応用』の訳者、桜井厚（現立教大学教授）である¹²⁾。もう20数年もまえに、金沢に私が住んでいた頃に、桜井厚氏とお会いして、氏からシュッツの音楽論を訳すのに骨が入ったことや小川未明の話をお聞きしたことがある。その頃から桜井氏はシュッツ理論の応用をライフストーリーの方向—「伝記研究」の一変種というべきか—に求めていたことが理解される。戦前の日本における社会学の生活史研究とシュッツ理論の「出会い」を主題にするなら、ライフストーリーを提唱する桜井厚による「アルフレッド・シュッツの応用研究」のレリヴァンス問題を論じる必要があるとおもう。ここでは、しかし、拙著『物語における社会とアイデンティティ—あかずきんちゃんからドストエフスキーまで—』について一言し、シュッツ理論のささやかな〈アプリケーション〉のレリヴァンス問題の一例として触れておきたい。

シュッツの現象学的社会学的研究をなにか実際の授業に役に立たせてみたいと、私はあるときから考えるようになった。シュッツには独特の社会や人間の見方がある。その見方を、一人称単数の物語、〈わたし語り〉の作品の多い大江健三郎の小説やドストエフスキーの小説などに適用してみたらどうだろう。教室の学生諸君も興味をもつのではないか。〈文学作品〉を

とおしてシュッツの〈現象学的社会学〉の〈面白さ〉を伝えることができないだろうか。こうして試論的に毎週の講義の中で実験してみたものを、1つにまとめたのが『物語のなかの社会とアイデンティティ』である。本稿の63ページに示した「シュッツ研究に関連性の高い」専門用語を直接解説するよりも、これを具体的な〈物語〉の世界に移植してイメージするほうが、伝える側も伝えられる側もコミュニケーションが容易ではないか。学生諸君の中には「やさしいことを難しめに話す」授業と評価するものがある。伝える側は「難しいことをやさしめに話す」ことを意図しているのであるが。

4-3 まとめ

理論研究の面でも応用研究の面でも、シュッツ研究者の1部には「もうシュッツ研究は終わった」という声がある。シュッツ研究は、既にもう〈脱求心化〉しつつある。「熱しやすく冷めやすい」。はじめに述べたように、わが国におけるシュッツ研究がひろく認められるようになったのは極々近年のことである。シュッツは、感想を述べれば、〈京の町屋の建物〉に似ている。これで〈お仕舞い〉ということはない。おしまいと思っていると、その奥にまた別の部屋が現れる。まだまだ知らないことが沢山ある。「入り口は狭いが奥が深い」。入りやすいが出るのは難しい。研究は、本当に根気の入る仕事である。時代が変わっても、この根本は、変わらないと思う。沢山水を飲んで、ゆっくり歩きたい。本日の話が皆さんのなにかに役立つことが出来たら嬉しい。(2007.5.17)

注

- 1) シュッツとは何者か、どんな人物かという質

問にたいして、ヘルムート・ワグナーとミハイル・バーバーの2つの『シュッツ伝記』から多くを学ぶことができる。〈ワグナー=タイプ〉のシュッツ論の特徴：シュッツという人物は「どのような哲学仲間や社会学の仲間との付き合い」のなかで現象学的社会学を〈切り開いた〉かに焦点を当てている。ひとりの研究者の理論の内容とその研究の特質を〈探る〉うえで〈^{リファレンスグループ}準拠集団〉としての仲間・友人たちとの〈関わり〉に注目することの^{バーテンパント}社会学的意義をこのタイプの研究は示唆している。もう1つは〈バーバー=タイプ〉の^{バーテンパント}参加する市民としてのシュッツ論である：シュッツという人物は「日常生活の社会学」の創設者といわれるが、バーバーによれば、シュッツ研究者はこれまでシュッツその人の日常生活の世界が〈どのようであったか〉に関心を寄せてこなかった。時代を生きる〈生活者〉の主観的・間主観的意味の世界に注目する〈伝記をものする〉研究の社会学的意義を、このタイプの研究は示唆している。以上の2つのタイプの〈研究〉はわが国におけるシュッツ研究の動向を測る〈物差し〉として、大事ではないかと思う。なお、バーバーの〈伝記をものする〉シュッツ研究の〈概要〉は以下のとおりである：—

[1]「混乱のウィーンで大人になる」[1899～1918]：シュッツの青年時代・オーストリー人であり、ウィーン市民であるという〈コンテクスト〉・第一次世界大戦の勃興・戦争終結からヒットラーのオーストリア併合へ・研究と職業・結婚と新家族の形成 [2]「社会科学と哲学 (1919～38)」：ウェーバーとベルクソン／シュッツとウェーバー／ベルクソンからフッサールへ [3]「哲学と社会科学 (1919-1938)」：フッサールとミーゼスとケルゼン／フッサールの現象学と『社会的世界の意味構成』／オーストリー経済学派、価値自由と経済学のコンテクスト／ケルゼン、純粋法学とアルフレッド・シュッツ [4] 未発表原稿 [1936.8～1937.8]：「社会的世界における人格性の問題」／1937年の合衆国旅行日記 [5]「ドイツ・オーストリー併合」：家族はただちにアメリカへ国外移住する

1938・4・13-1938・6・12／シュッツの両親をウィーンからパリへ国外移住させる計画 1938・6・12-1939・4・6（およびイルゼの母、ギゼラ・ハイム1939.6.4）／パリから合衆国へ向ってシュッツ家族が出発する1939・4・7-1937・7・14 [6]「再建」：合衆国における生活不安／他の移住者たちを助ける／通常業務と新しいアカデミックな世界 [7] 第2次世界大戦時代：編集、教授、戦時調査、業務／家族と友人たち／出版／息子の病气 [8] シュッツはニヒリスト？：よそ者論と「シュッツ=ゲールヴィッチ論争」／フューゲリン=シュッツ論争／論争の評価：倫理問題への参与者のスタンスの必要 [9]「戦後の平和と生産性」：戦後のライター商会での仕事／ニュースクール・フォア・ソーシャル・リサーチ／PPRの編集委員と国際現象学会／家族の悲劇と友情／研究と出版 [10]「1952年から1956年までの時代」：人生真つ盛り期の責任ある生活者／常勤職生活の最後の時代／家族生活：年長世代の世話と年少世代の世話／国際現象学会と編集責任／ニュースクールでの教授と行政、^{メントール}指導者のシュッツ [11]「1952年～1956年」：哲学の産婆術—往復書簡と研究／往復書簡のなかでの同僚関係／広範囲におよぶ関連論文の出版 [12]「平等の探求」：平等と社会的世界の意味構造／人間の平等の諸側面；科学・哲学・宗教会議の第15回シンポジウム／1956年倫理学研修会／シュッツ、倫理学と平等の探求 [13]「勝利と没落, 1957年～1958年」：現象学界での議論と成功／ニュースクール・コミュニティでのアクティブな一員として／往復書簡による同僚との出会いと助言 [14]「死と新しい始まり」：病气／死と弔辞／遺稿集の出版／継承者たち

2) 例えば「リアリティ」「レリヴァンス」「生活世界」など、これらは「シュッツ社会学」の基本的語彙に属するが、学生時代に私たちが参考にした福武・日高・高橋編（1956）『社会学辞典』はむろんのこと、その後1970年代に編まれた濱島・竹内・石川編（1972）『社会学小辞典』においても「リアリティ」「レリヴァンス」「生

活世界」などの語彙は〈未採録〉であった。図表5に掲げられた〈シュッツ理論の基本語彙〉がほぼ完全に収録され、読者の参考に供されるようになるのは、森岡・塩原・本間編(1993)『新社会学辞典』その後の濱島・竹内・石川1997『新版・社会学小辞典』においてである。大げさにいえば1990年代、つまりいまから約10年前、〈シュッツ理論〉は日本の社会学界において、漸く、1つの社会学的理論としての足場を築いた、ともかくも『辞典』には〈定着〉したということである。

- 3) この〈ニュー・ジェネレーション〉の現象学的社会学は、〈オールド・ジェネレーション〉の理論社会学〈タルコット・パーソンズ〉〈マックス・ウェーバー〉〈エミール・デュルケム〉[Voluntarism/Idealism/Positivismのトリアド理論]の理論について〈なに〉を〈どのよう〉に〈変えた〉ののだろうか。〈なに〉も変えなかったともいえるし、〈すべて〉を変えてしまったともいえる。今から60年前パーソンズとシュッツの手紙のやり取りを読み直してみると、誰もがこのような〈両義的な〉見解をもつに違いない。パーソンズのシュッツへの返答「私はあなたの議論のなかに私の立場を揺るがすようなものを見出せません」は、2人の議論後に〈なに〉も「変わらなかった」ことを証拠立てている。反対に、シュッツのパーソンズへの返答「私はただちにあなたの体系の重要性和価値がわかりましたし、同様にわたしの書物が終わるところでそれがはじまるという事実もわかりました」は、2人の議論前に〈すべて〉が「変わっていた」ことを証拠立てている。—詳しくはSato Yosikazu, 2006, Life-world and the Theory of Social Action in the 1940s: Rereading the Correspondence of Schutz with Parsons and Gurwitsch『立命館産業社会論集』第42巻第3号47-66頁を参照—。とはいえ〈なにかが起きた〉のであり、話し合いは〈不毛ではなかった〉。読み返し、読み直して見えてくる暫定的な結論がある。第1に、2人はともかくも〈話し合った〉。第2に、〈話し合った〉結果〈何かがおこった〉。即ち、話し合いは、結果として、

2人の〈一致〉点よりも〈対立〉点を明瞭すぎるほど明瞭にした。次に、以上のことからひとつの〈新しい全体連関〉が〈見えてくる〉。2つの異なる見方の〈共存〉の可能性というゲシュタルト形成の構図である。喩えるならば、ルビンの〈2人の人物の横顔と盃〉の絵が示す〈両義性〉の問題である。「^{フイギヤードグラウンド}図と地^{ウィルクリヒカイト}の反転」¹、1枚の絵のなかにSは白地の〈2人の人物の横顔〉像を見、Pは黒地の〈盃〉の像を見る。見方によって同じ1枚の絵の〈意味付け〉が違ってくる。パーソンズとシュッツは〈^{エクスベリアンス}経験〉の世界における〈観察〉領野と〈体験〉領野、〈^{ジンハフト}意味を帯びた〉世界における〈^{アナレチイカルリアリズム}客観的現実〉[〈^{リアリテ}分析的实在主義〉と〈^{ゲシヒテ}主観的現実〉、社会的文化的世界における〈^{ストラクチャー}歴史〉の〈^{ゲシヒテ}構造〉と日常生活(市民)の日常生活(市民生活)における〈^{ゲシヒテ}話〉の〈^{アウフバウ}作り〉というトピックを問題として議論し合っていた。これらは、一個同一の〈生活世界〉に対して〈取り得る〉私たちの〈注意のまなざし〉の両極、〈パースペクティブ〉の両極(=行為者の目と観察者の目)、あまりにも明瞭な違いである。2つは目前に〈立ち現われる〉「生(活)の世界」の〈異なる姿〉に他ならない。ルビンの指摘するゲシュタルトの〈図と地〉反転の一例といえないだろうか。科学者^{ウィッセンシャフトラー}による社会的出来事^{エクスベリアンス}の経験^{エクスベリアンス}や客観的現実^{客観的現実}の〈^{ゲシヒテ}歴史〉に着眼するパーソンズ(『社会的行為の構造』)と、生活する者^{バーテイルシペーティング・シテイズン}による〈^{リウッド・エクスピアリヤンス}生きられた経験の〈^{リアリテ}現実〉の〈^{ゲシヒテ}話〉[=体験談]に着眼する現象学的社会学者シュッツ(『社会的世界の意味〈構成〉』)。私たちが〈^{リアリテ}生きている世界〉において〈^{ウィルクリヒカイト}客観的現実〉と〈^{リアリテ}主観的現実〉とは一方を〈図〉とすれば他方は〈地〉の関係にたち、〈図〉と〈地〉は相互反転する〈全体〉[=生活世界]の〈うち〉にある。シュッツはこの〈生活世界〉における観察者のパースペクティブと行為者のパースペクティブの間の〈相互反転〉と〈^{コントラ}臨界〉を見極めるために〈新しい〉語彙群—レリヴァンス・リアリテイ・生活世界・構成・意味付与・意味解釈・他者理解・自己理解・類型など—の精練に腐心したのである。その中に〈生活しているもの〉に

は〈社会的世界〉はつねに当の個人の〈視座〉^{パースペクティブ}から〈意味を帯び〉る構成の〈構造〉^{ストラクチャー}（社会的直接世界・社会的同時代世界・社会的先代世界・社会的後代世界）として立ち現われるのであり、〈論理〉によって純粹に組み立てられる〈構成〉^{コンストラクション} [=カルナップの「世界の論理的構成」]でもなければ、すでに〈客観的な文獻〉のなかに凝固し生成し去った過去の生、〈歴史的現実〉の〈構造連関〉^{ストラクチャー・ファンクショナル・リレーション} [=ディルタイの「世界の歴史的構成」]でもない。単なる〈歴史〉^{ゲシヒテ}の世界でも単なる〈論理〉^{ロギック}の世界でもない「生の世界」。いっさいの学的認識に対して〈意味を帯びている生の世界〉^{レーベンズヴェルト}が〈先行する〉。まずこれを見定めよう。シュッツのこの「一念発起」こそ、〈客観的・実証的・形式的・数量的・理念的・概念的〉^{ウィルクリヒカイト}な現実観によって構造化される社会科学の認識の〈図〉柄を背景へと追いやり、これまで地平化していた〈主観的・解釈的・象徴的・質的・有意味的・体験的〉な生の現実^{リアリティ}を前景の〈図〉の世界として立ち上がらせる。伝統的社会学的理論から新しい現象学的社会学への〈地／図＝反転〉の〈パースペクティブ〉転換の瞬間である。「裸の王様」のはなしの中の〈子ども〉と〈シュッツ理論〉の目線は重なる。

ついでに付言すれば、伝記—(Biography) = 〈Lebensgeschichte〉 = Life Historyの研究は、シュッツの一念発起を待つまでもなく、〈主観的・解釈的・象徴的・質的・有意味的・体験的〉な生の現実^{リアリティ}の構築の営為であったことを、シュッツとはほぼ同時代を生きた、ハンナ・アーレントによる「あるユダヤ女性」の伝記研究—Hanna Arendt (1981), *Rahel Varnhagen: Lebensgeschichte einer deutschen Jüdin aus der Romantik*, Piper München—を読めば明らかであろう。ハンナ・アーレントはその序言において次のように書いている—「私には一度もラーエルについて書こう、彼女の人物について心理学や外部から著者が持ち運ぶカテゴリーを用いて書こうというような意図はなかった…ただ、私に関心があったのは、ラーエルの生活史を彼女自身が自分のことを話すとすれば、こうであったであろうというふうに再現することであっ

た。どうして彼女は、他の人たちが彼女についていっていることとは違って、自分が〈特別だ〉とみなしたのか、彼女はこれをほとんど彼女の生涯のあらゆる時期において同じ言い回しや造語で表現しようとしたのである。そのいっさいを書きかえるとすれば、彼女が〈運命〉Schicksalと理解したことである。彼女に重要であったのは、〈傘なしに悪天候に〉遭ってしまうように、人生にむき出しに身を曝すことであった。（「何をしていますのです？」「何も。私は人生がわが身に降り注ぐままにしているのです」）。(S.12, 邦訳4-5頁。)シュッツ理論は、たとえばこのようなアーレントの「生活史」研究に一つの方法論的基礎づけを与えたといえる。

- 4) 「日本におけるシュッツ研究の歴史」については次の文献を参照せよ。Sato Yoshikazu (1999), Tomoo Otaka and Alfred Schutz in the 1930s—Their Social Theory and Its Socio-Cultural Background—『立命館産業社会論集』第35巻第1号, Sato Yoshikazu (1999), Phenomenological Sociology in Japan: Past and Present— with Special Reference to Alfred Schutz—『立命館大学産業社会論集』第35巻第2号]。
- 5) その他70年代のシュッツ理論の普及に重要な役割を果たした著作として山口昌男 (1975)『文化と両義性』岩波書店, 山岸健 (1977)『社会的世界の探求』慶応通信, 下田直春 (1978)『社会学的思考の基礎—社会学基礎理論の展望』新泉社などがある。小論文ではあるが『「合理性」概念寸考：アルフレッド・シュッツの所説を中心にして』(佐藤1968)は、青山版=シュッツ論に次いで日本における〈シュッツ理論〉研究の最初期に位置づけられる。シュッツの後期論文に依拠しながら、この論文は〈人間の行為的世界〉に関する社会科学的研究の〈方法論〉や〈認識論〉の基底に横たわる〈社会的世界の内部に生きる人びとの経験〉〈常識的な日常経験〉の意味層に着眼することを要請して、社会科学の世界と〈日常生活〉世界との〈相互関係〉を〈既に意味を帯びた秩序〉の異なる単位（第一次階梯と第二次階梯）の問題として明示化し

たのである。

- 6) 現在ドイツ語版『シュッツ著作集』[*Alfred Schütz Werkausgabe* (Hrsg.) Richard Grathoff, Hans-Georg Soeffner & Ilja Srubar, UVK] は全 9 巻12冊の刊行が企画され、2003年から2006年現在まで既に第1巻から第5巻まで6冊が発刊されている。参考までに各巻の書名のみ記す。
 ASW I *Sinn und Zeit — Frühe Wiener Arbeiten und Entwürfe*、『意味と時間—初期ウィーンの研究と構想』
 ASW II *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt — Eine Einleitung in die verstehende Soziologie* 『社会的世界の意味構成—理解社会学入門』,
 ASW III.1, III.2 *Philosophische-phenomenologische Schriften* 『哲学・現象学著作集』,
 ASW V.1 V.2 *Theorie der Lebenswelt* 『生活世界の理論』,
 ASW VI.1, VI.2 *Relevanz und Handeln* 『レリヴァンスと行為』,
 (以上既刊) そのほか ASW IV *Zur Methodologie der Sozialwissenschaften* 『社会科学方法論』(未刊)
 ASW VII *Schriften zur Phänomenologie der Musik* 『音楽の現象学著作集』(未刊),
 ASW *Schriften der Literatur* 『文学著作集』(未刊)
 ASW *Strukturen der Lebenswelt* 『生活世界の諸構造』(未刊)。
- 7) エピソードをもう一つ述べる。故尾高朝雄(1899-1956)の実弟に社会学者の故尾高邦雄(1906-1993)がいる。尾高朝雄とアルフレッド・シュッツとの間の「手紙のやり取り」を調べにドイツからやってきたシュッツ研究者のR・グラートホフ(ビーレフェルド大学教授)—1987年9月、国際現象学会日本大会(新潟大学)の折に来日—が、是非尾高邦雄教授に面会したいという。その連絡の役目を受け持ったのはたまたま筆者であったが、そのとき電話越しに語られた尾高邦雄教授のことばが印象深く記憶に残っている。「兄貴がね、ほくにシュッツさんの書いた本を読めと言うものだから。ほくも読みましたよ。兄貴は哲学(法哲学者)でしたがね、ほくは実証(屋)でしょう。だから、全然だめだったね。興味がねえ…だからほくのところにその方がこられてもねえ。碧海純一さんが兄貴のお弟子さんだから、そちらに言って

おきますから。」後日談。その折グラートホフ教授は東京で広松渉教授とシュッツについて議論した。「ヒロマツは、自分の意見ばかりのべて、ボクの話など聞く耳をもたないのだからなあ」このエピソードも興味深いものがある。

- 8) 日本における〈シュッツ理論〉に投錨した〈本格的な〉研究の全体について素描することはここでの私の能力を超えている。以下のリストは、1980年代以降に出版されたシュッツ関連の著作のうち筆者の〈手元にある〉ものを年代順に列記したものである。山口節郎(1982)『社会と意味—メタ社会学的アプローチ—』勁草書房、片桐雅隆(1982)『日常世界の構成とシュッツ社会学』時潮社、江原由美子(1985)『生活世界の社会学』勁草書房、江原由美子・山岸健編(1985),『現象学的社会学—意味へのまなざし』三和書房、西原和久編著(1991)『現象学的社会学の展開』青土社、浜日出夫(1992)『現象学的社会学からエスノメソドロギーへ』[好井編『エスノメソドロギーの現実』世界思想社], 森元孝(1995)『アルフレート・シュッツのウィーン—社会科学の自由主義的転換の様相とその時代—』新評論、森元孝(1995)『モダンを問う』弘文堂、那須壽(1997)『現象学的社会学への道—開かれた地平を求めて—』恒社社厚生閣、西原・張江・井出・佐野編著(1998)『現象学的社会学は何を問うのか』勁草書房、西原和久(1998)『意味の社会学—現象学的社会学の冒険—』弘文堂、山田富秋(2000)『日常性批判—シュッツ・ガーフィンケル・フーコー』せりか書房、片桐雅隆(2000)『自己と「語り」の社会学—構築主義的展開—』世界思想社、西原和久(2003)『自己と社会—現象学の社会理論と〈発生社会学〉』新泉社、佐藤嘉一(2004)『物語のなかの社会とアイデンティティ—あかずきんちゃんからドストエフスキーまで』晃洋書房、片桐雅隆(2006)『認知社会学の構想—カテゴリー・自己・社会』世界思想社等。
- 9) 一方、遅蒔きながら、日本におけるシュッツ研究家—〈シュッツの本を何度も読み直し〉〈ただ座って本を調べる〉^{アームド・チェア}だけの仕事をするヒトの側も、ようやくアルフレッド・シュッツの

「現象学的社会学」の全体像について〈編み上げる〉段階に到達しつつある。雑誌『情況』は、2000年8月号別冊において「現代社会学の最前線」[3]: 実践—空間の社会学: 他者・時間・関係の基層から」の特集をくみ、「知の実践—意味の関係空間への照準」のなかで、'Das Eigene und Das Fremde' (訳「固有なもの」と異他的なもの」) ヴァルデンフェルス (ボッフム大学) や「エスノメソドロジーと実践の論理」マイケル・リンチ (ブルーネル大学) 等の論文とともに「アルフレッド・シュッツにおける『建築の意志』」(佐藤嘉一) を掲載した。この論文は、シュッツの場合「『意味構成』から『生活世界の諸構造』まで、その間にみられる種々様々な諸著作を〈意味ある秩序〉にもたらし一本のはっきりした線が引かれている」こと、また「その分析の特徴がエゴロギー的であり、その方法が反省的である」というトーマス・ルックマンの主張を支持して、建築の意志Ⅰ (ベルクソン哲学とのシュッツの格闘): 「生の諸形式の理論」、建築の意志Ⅱ (フッサール哲学とのシュッツの格闘) 『意味構成』と社会的世界の構成分析の概要、建築の意志Ⅲ: (ザッヘそのものにつく精神) 『意味構成』以後について通観しようと企図したのである。—「この一連の問題関心を一つに束ねて言うということになるのだろう。わたしがのんびりと日常生活をすごしている際に『社会的世界』を理解することと、わたしが〈科学的観察者〉(社会学者や社会学者) として『社会的世界』を理解することとの間には、どのような関係があるのだろうか。いま、前者の理解の問題に焦点をあてる理論的関心を「生活世界の構造」の問題、後者の問題のそれを『社会科学の方法』の問題と呼ぶなら、シュッツにとって再三再四興味の対象になったのは、…この両者の『かみ合わせ』の問題である…社会科学の特殊な問題は、その対象領域、社会的世界がすでに一個の特殊な意味 = 〈レリヴァンス〉の構造を示しているところから生ずる。ウェーバーの〈理念型〉にせよ、パーソンズの〈行為の準拠枠〉にせよ、これは『社会的世界』の〈解釈の道具〉である。この道

具は『社会的世界』において行為する人間(『人格』)の『日常的理解』や『日常的な類型形成』の諸構造に由来する。…シュッツは生活世界の類型化されている意味の構造(第一次的秩序)が社会科学の類型形成(第二次的秩序)の指導原理であることを発見したのである。…『日常の知』と『科学の知』のかみあわせ…日常知は『実際に構造化』されており、未来に開かれ、曖昧で、行為のコンテクストに縛られている。科学の知は、任意の支配的な『科学上の問題レリヴァンス』に応じて方法的な理念化と説明の定式化・再定式化のプロセスを貫く。』

以上の主題の解明に必要な〈工具〉、日常知と科学知との〈かみ合わせ〉の問題を解明する〈道具〉としてシュッツは、〈現象学的社会学〉の諸カテゴリーを編み出したのである。これらのカテゴリーは現象学的社会学の応用として〈生活史 life history〉や〈語り Narrative〉の分析などに用いることができるはずである。表3「シュッツ研究に関連性の高い事項(語彙)群」を参照。

- 10) アルフレッド・シュッツのドイツ語文献として以下の研究書は参考にされてよい。初期のシュッツを知る上でこれらには不可欠の優れた洞察が見られる。1. Elisabeth List u. Ilja Sruhar hrgs. (1988), *Alfred Schütz: Neue Beiträge zur Rezeption seines Werkes* [Amsterdam]. 2. Walter M. Sprondel u. Richard Grathoff hrsg. (1979), *Alfred Schütz und die Idee des Alltags in den Sozialwissenschaften*, [Enke Verl.] 3. Richard Grathoff u. Bernhald Waldenfels hrsg. (1983), *Sozialität und Intersubjektivität* [Wilhelm Fink Verl.] 4. Rudiger Welter (1986), *Der Begriff der Lebenswelt: Theorien vortheorietischer Erfahrungswelt*. [Wilhelm Fink Verl.] 5. Ilja Sruhar, 1988, *Kosmion: Die Genese der pragmatischen Lebenswelttheorie von Alfred Schutz und ihr anthropologischer Hintergrund*, [Frankfurt am Main]. 6. Richard Grathoff (1989), *Milieu und Lebenswelt: Einführung in die phänomenologische Soziologie und die sozialphänomenologische Forschung* [Suhrkamp].

1930年代の〈アルフレッド・シュッツと尾高朝雄〉との〈交友〉関係すら、ごくわずかな人びとを除けば、ながい間〈知らない〉状態に取り残されていた。久留米都茂子（2001）『心の一隅に棲む異邦人』信山社は、アルフレッド・シュッツとの直接的な「出会い」を証言する、大変貴重な〈自分のなかのアルフレッド・シュッツ〉論である。特に同書「55. シュッツ博士」228-231頁参照。

- 11) もう大分以前の話になる。私はたった一度ニューヨークにシュッツ夫人を訪問したことがある。1989.11.30-12.1の2日間「アルフレッド・シュッツ・メモリアル・シンポジウム」がニューヨークの「ニュースクール・フォア・ソーシャルリサーチ」で開催された折、私は Prof. R. Grathoff や Dr. Sussane Kasab（現 Yale University 教授）等と一緒にシュッツの自宅を訪問した。イルゼ・シュッツ夫人は〈生前〉のシュッツを回想して、シュッツの著作活動について私たちに以下のように語ってくれた。—「私の夫は本を書かなかったひとであるとは申せません。むしろ沢山の本を書いたひとであると思います。銀行の仕事を終えると、すぐにこちらの部屋のピアノにむかって時間を過ごしました。子どもたちはいい子たちでした。お父さんの邪魔をしないように静かにしていましたから。それから夜は遅くまで机に向って手紙を書いていました」シュッツの家はセントラルパークのほぼ中央に位置する清閑な場所の、日本語ではマンションと表現されるビルディングの四階にあった。書斎の壁には尾高朝雄から贈られたという幅一間もあろうかと思われる風景画が飾れていた。[なお、佐藤訳（1996）『亡命の哲学者たち』解説526-536頁を参照]。
- 12) 桜井は「ライフストーリー」や「ライフヒストリー」等の研究領域に「現象学的社会学」の応用の道を見出している。著作には『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門』『ライフストーリーとジェンダー』『戦後世相の経験史』『ライフヒストリーの社会学』『境界文化のライフ・ストーリー』など多数である。〈生

活史〉ないし〈人生語り〉の方向へのシュッツの応用の試みである。

資料および追記

参考資料①「日本におけるアルフレッド・シュッツ研究の特徴と動向(1)」および参考資料②「日本におけるアルフレッド・シュッツ研究の特徴と動向(2)」いずれも一部修正：出典 <http://www.waseda.jp/Schutz/> にもとづいて作成した。参考資料③「アルフレッド・シュッツの『往復書簡』（1932-1959）頻度調べ」の出典も上に同じ。上記の資料は、この論文をまとめるに当たって大変有意義であった。ただし、この資料には基本的にシュッツの翻訳書は含まれていない。前述のとおり、わが国におけるシュッツ研究において「翻訳書」の果たしてきた役割は大きい。例えば、シュッツ著／深谷昭三訳（1974）『現象学と社会の学：他我認識の学』三和書房などは、シュッツにおける「問主観性の問題」の特異な性格を知る上で重要な文献である。70年代にこれを紹介した深谷氏の功績は大きい。またこの論文の脱稿後に日本におけるシュッツ研究の最近の進展を知る機会を得た。那須壽を研究代表とする国際的な広がり

のシュッツ研究（2004）『アルフレッド・シュッツによる蔵書への「書き込み」の研究：Studies on Annotation by Alfred Schutz』：2001年度-2002年度科学研究費補助金（基礎研究C-2）もその1つである。那須は、この研究報告書の中で次のように述べている。「今日のシュッツ理論研究は、第二期にあるといってよい。すなわち…今日の研究状況は、シュッツが『昼は銀行家、夜は哲学者』といった生活を送りながら寸暇を惜しんで書き留めていた断片的な草稿や、L・ミーゼス、F・ハイエク、E・ヴェーゲリン、F・マッハルプといった斯界の第一級の研究たちと交わした膨大な書簡などに目が向かい、シュッツの業績がさらに緻密に、かつその全体にわたって研究され始めた点にその特徴がある」（はじめに、1頁）。この指摘は、本稿においてシュッツ研究の現状について述べた事柄と認識を共通にすると

ころがる。シュッツ研究は新しい段階に入った。単独の研究者には全く手に負えそうにない、厄介で、気が遠くなるような、資料を丹念に渉猟するような仕事

が前途に待ち受けている。逆にいえば、それぞ

れの研究者にたいして改めて「シュッツ研究」の
〈レリヴァンス〉が問われ始めているともいえる。
(2007.6.21了)

参考文献

(本文には引用されなかったが、今後のシュッツ研究にとって最重要と思われる若干の文献を記す)

- Alfred Schutz (1996) *Collected Papers IV*, ed.,
Helmut Wargner, George Psathas and Fred
Kersten, Kluwer Academic Publishers
- Alfred Schütz/ Erick Voegelin (2004) *Eine
Freundschaft, die ein Leben ausgehalten hat:
Briefwechsel 1938-1959*, UVK.
- Ilja Srubar (1988) *Kosmion: Die Genese der
pragmatischen Lebenswelttheorie von Alfred
Schütz und ihr anthropologischer Hintergrund*,

Suhrkamp.

- Helmut R. Wagner (1983) *Phenomenology of
Consciousness and Sociology of the Life-world:
An Introductory Study*. The University of
Alberta Press.
- Kurt H. Wolff ed., (1984) *Alfred Schutz: Appraisals
and Developments*, Martinus Nijhoff.
- Gilbert Weiss (2000) *Theorie, Relevanz und
Wahrheit: Eine Rekonstruktion des Briefwechsels
zwischen Eric Voegelin und Alfred Schütz (1938-
1959)* Wilhelm Fink Verlag.
- Eric Voegelin, Alfred Schütz, Leo Straus und Aron
Gurwitsch (1993) *Briefwechsel über „Die Neue
Wissenschaft der Politik“* (hrsg., Peter J. Opitz)
Verlag Farl Alber.

Some Problems of the Study of Alfred Schütz in Japan

SATO Yoshikazu *

Abstract: It was in late fall of 2006 that the annual general meeting of Japanese Sociological Association was held at Ritsumeikan University. On that occasion Prof. Sato Tsutomu (Shukutoku University, Chiba Pref.) asked me if I would be willing to come to speak at one of the graduate course seminar sessions organized by him and his colleagues, and at the same time he suggested me that it would be very nice to give a lecture on the subject, ‘Some Problems of the Alfred Schutz-studies in Japan’, and added to request that I, if possible, should show some interesting book for the students to read before their attending my class. I answered him to accept his offer, and wrote him a letter that, yes, of course, it would be good for the students to read Mori Mototaka’s *Alfred Schutz — Social Reality and Social Space* — (Tôshindo series; Sekai no Shakaigaku / Nihon no Shakaigaku, 2001). Thereafter, in this April, I got a letter from Prof. T (Head of the Graduate School), who insisted on me to have some of my own books recommended. So, I replied him that there was my book entitled *Society and Identity in the Narrative – From Red Riddle To Dostoyevsky* — (Koyoshobo, 2002). However, while I was engaged upon my work, I found that I was going forward in a quite different direction, and beyond the contents that I got of my ideas when I had talked to Prof. Sato.

In the following I tried to put my ideas in order, based on a transcript of my then stated lectures, and thereafter with making a few additions and modifications. I would like contribute this article to the volume of the *SANSHA-RONSHU*, as a kind of report of the author’s achievement in the area of his scientific and educational activities.

Constitutions of Article; (1) Rereading Alfred Schutz, (2) Some influences of Alfred Schutz upon the academic world of Japanese Sociology viewed from literature and so on. (3) Schutz-Studies in Japan — from the period of Cradle to Schutzian Centenary Anniversary (1999) (4) Some Issues of Alfred Schutz-Studies in Japan

Keywords: Alfred Schutz, *SHAKAIGAKUHYORON*, Biography, Study of Life History, Doing ‘rereading’

* Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University